

論文要旨

東京藝術大学大学院
美術研究科博士後期課程
美術専攻日本画研究領域
学籍番号 1321904

張騫

筆者は、東洋絵画における「写意」を再考し、その現代美術における特色を探求することを試みている。東洋絵画、特に水墨画において「写意」は対象の表面的な形態を再現する造形手法でありながら、その創作形式は写実主義の絵画とは異なり作者の主観的な意図に構造されている。

伝統的な写意絵画において「不似之似」は基本原則の一つであるが、写実とアブストラクトの両面を持っている。「似」とは、作品中の写実部分を指し、作者が客観的な形象を観察し模倣し再現することを意味する。一方、「不似」は、作者の個人的な感情や水墨の特性に対する理解がもたらすアブストラクト効果を表している。水墨画家たちは、細密な写実表現には適さないがゆえに、墨と水という二つの媒質の独特な美感を発見した。そして最終的に完全な写実主義を放棄し、水墨の特性を活かす道を選んだ。この過程において「不似之似」は水墨表現の最良の選択となり、伝統的な写意の概念の組織論理と美学的原則となった。

中国では近年、多くの芸術家が水墨芸術と写実主義、表現主義、抽象主義を結びつけ、水墨芸術の現代化を図っている。現代美術絵画、特に抽象主義絵画において、芸術家たちは通常絵画形式の内在的な均衡や絵画自体の構造原理を重視し、従来の造形原則をあまり重視していない。しかし、東洋伝統絵画がその根本的な芸術枠組みを離れると、その根幹を失うことにもなる。言い換えれば抽象主義絵画の純粋な精神性という非物質性の追求と、自然を尊重し、人と自然の共生や「天人合一」を強調する東洋伝統絵画の理念との間には、構造的な矛盾がある。中国や日本の伝統絵画において構造原則を過度に強調し、それを「抽象」しようとすることは伝統に合致しない。したがって、「東洋的質感」を持つ現代絵画作品においては、しばしば自然物の形象を模倣し簡略化する傾向があるが、これらの形象は日常の体験から生まれるものであり、純粋な形式の探求ではない。

絵画以外の分野では、「アルテ・ポーヴェラ」や「もの派」などの現代美術の流派において素材そのものが主要な研究対象となり、作品の形式は素材自体に依存することが多い。筆者は、現実生活の中で、物体が腐食、劣化、破損、照明や距離などの要因によりって通常の認識が薄れることに気づいた。これらの物体に直面したとき、人々はその元の機能や全体的な形象を無視しがちであり、それらの点、線、面、色彩および形式の内在的な関連性に直感的に注目し、その物質特性を認識することになる。今日、「アルテ・ポーヴェラ」、「もの派」などの現代美術および抽象主義が広く受け入れられているとはいえ、これらの物体をそのまま展示会に置くと、人々はそれらを芸術家が解体または選別した芸術作品として見るが多く、その現実的な属性にはあまり注目しないであろう。現実ではないみかけをした「現実なもの」においては、その元の機能や特性をものはや重要でないものとなる。

この点に注目した筆者は素材を収集する段階で、現実ではないみかけをした「現実なもの」を選び、それを「現実の提喻」として見なした。次に、これらの物体の物質特性を重視し、写意の手法と水墨や岩絵具など東洋絵画の素材による絵画作品に変換した。この方法は、対象の表面的な形式を消去することで形式と芸術言語を抽出し、「東洋質感」へと変化する抽象絵画とは異なる。これによりに写意はもはや現実世界と作者の内面世界の再現のみならず、東洋伝統絵画材料の物質性も作品の主たるテーマの一つに取り込むこととなる。筆者は、水墨が写実表現を追求する際の制約が、東洋伝統絵画が初期から純粋な物質の特性を探求するきっかけとなったと考えている。「不似之似」における水墨表現の物質特性、材料媒介そのものの物質特性に関する解釈において、写意と多くの現代美術流派には多くの共通点とがあると考えている。

筆者の創作は、素材収集などの初期段階では現代美術の方法論を取り入れ、具体的な絵画制作過程では東洋的な伝統絵画の思考様式を堅持しつつ、水墨や岩絵具などの伝統素材と現代美術との関係を再考することを目指している。

本論文は全三章で構成され、以下に各章の概要を示す。

第1章「伝統的な写意と現代アートの異同」では、東洋写意がどのように現代美術の観点に転じたかを探究する。第1節「伝統的な写意と『不似之似』」では、写意の基本的な定義と文人画から発展した「不似之似」の基本特性を述べる。第2節「写意の可能性と実践」では、中国の美術大学で広く使用されている鉛筆素描と写意を組み合わせた「鉛筆写意」に焦点を当て、筆者自身の創作経験を交えながら写意と日本画の融合の可能性を探

究する。また、他の芸術家の現代美術と写意を融合させた先行作品を例に、筆者の創作にとの共通点と差異を論じる。第3節では、中国画における「リアリティ」概念を説明し、抽象美術との比較を通じて、東洋伝統絵画における「リアリティ」の特性を探究する。

第2章「筆者から見た写意」では、テーマ選定の原則と創作の要点を論じる。第1節「筆者におけるモチーフ」では、留学生としての視点から、日常生活で日本人に見過ごされがちな物体を発見し、一定の視角からこれらの物体を描くことについて再考する。筆者はそれらを「現実の提喩」と見なし、創作の素材とする。第2節『現実ではないみかけをした「現実なもの」』では、日常生活から「現実の提喩」となる物体を選ぶ方法と要点を分析する。第3節「筆者から見た写意」では、現実ではないみかけをした「現実なもの」をテーマとし、写意との共通点を探すとする理由を筆者の創作における写意の過程と特徴、メデイウムの再考察と岩絵具と墨を併用する点から明確にする。

第3章「提出作品 - 現代アートの視点における写意」では、「現実の提喩」における写意の理念を概説し、写意によって現実ではないみかけをした「現実なもの」を表現することが、なぜ絵画行為において伝統芸術に回帰することになるのかについて説明する。また、「モノ」と「ヒト」という二つの現実ではないみかけをした「現実なもの」をテーマとする提出作品2点を紹介する。そして「終わりに」では、これら2点の作品を制作するなかで生じた現代アートにおける「写意」と今後の課題と展望について述べる